



稲 穂

豊崎小学校 校長室通信
令和4年12月23日
第10号 文責 久保 亨

3年ぶりのバザー

令和4年もあっという間に年末を迎えました。先日の参観日では、子どもたちのために、楽しいバザーを開催してくださり、ありがとうございました。コロナ禍で我慢を強いられることが多い中、こうして保護者の方が子どもたちのために工夫し、努力しながら前向きに活動する姿を見せてくださることは、子どもたちにとって大きな財産となります。お忙しい中、本当にありがとうございました。来年度は、地域の方も一緒に参加できるバザーになることを願っています。



🏆 最後まで全力で戦うには… 🏆

さて、先日行われたサッカーのワールドカップでは、日本代表が大活躍でした。予選リーグでは強豪ドイツ・スペインを破り、決勝トーナメントに進出しました。日本にとっては素晴らしい勝利でしたが、ドイツ・スペインにとっては、「まさか」の結果だったでしょう。

プロ野球で監督をされていた野村克也氏が使っていた言葉に、「勝ちに不思議の勝ちあり。負けに不思議の負けなし。」というものがあります。勝った理由は、はっきりしないことがあっても、負けた理由は必ずあるということです。では、ドイツ・スペインが負けたのはなぜなのか、です。

敗因はいくつかあると思いますが、最大の原因は、「気の緩み」だと思います。ドイツ戦で言えば、前半、ドイツは圧倒的に有利に試合を進めていました。1点を先取したうえに、何度も日本の守備陣を崩し、チャンスを作っていました。日本には、チャンスらしいチャンスは1回しかありませんでしたので、ドイツが「これは楽に勝てそうだ」と思っても不思議ではない状況でした。しかも、ドイツは過去に日本に負けたことはありません。

人間の体を動かすのは脳からの指令です。脳はコンピュータとは違い、感情に大きな影響を受けます。油断した状態では、パフォーマンスは下がります。さらに、予想外のことが起こる（日本が同点に追いつく）と、動揺してしまいます。動揺すると、焦りが生まれます。焦った状態では、冷静な判断ができません。

しかし、相手がいくらそんな状況でも、自分たちの気持ちが下がっては、逆転はできません。逆転できたのは、日本の選手たちがあきらめていなかったからです。では、なぜ強豪チームにリードされていてもあきらめなかったのか。それは、選手たちが自分の弱い心や昨日までの自分に勝とうとする強い心をもっていただからだと思います。うまくいっているとき、調子がよいときは、誰でも頑張れます。そうではないときに頑張るためには、ひたむきに努力する粘り強さ・心の強さが必要です。

日本代表チームは、子どもたちに大変よいお手本を見せてくれました。しかし、子どもたちは、言うて聞かせるだけでこうした心の強さを身につけられるわけではありません。学校では、これからも、「頑張ればできる」という達成感をもたせて自己肯定感を育てていきます。ご家庭でも、ぜひ、長期休業中に様々な体験をさせながら、自己肯定感を育てていただければと思います。

